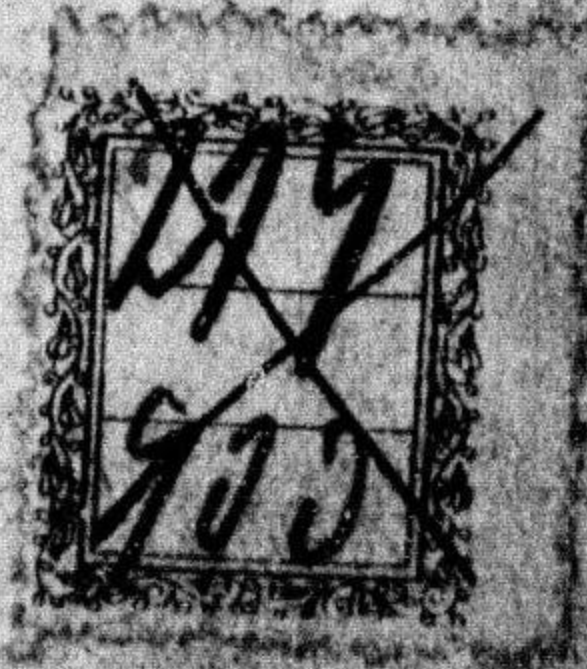


詩集
素描

明石國助
鶴卷恒松
竹内勝太郎

1919

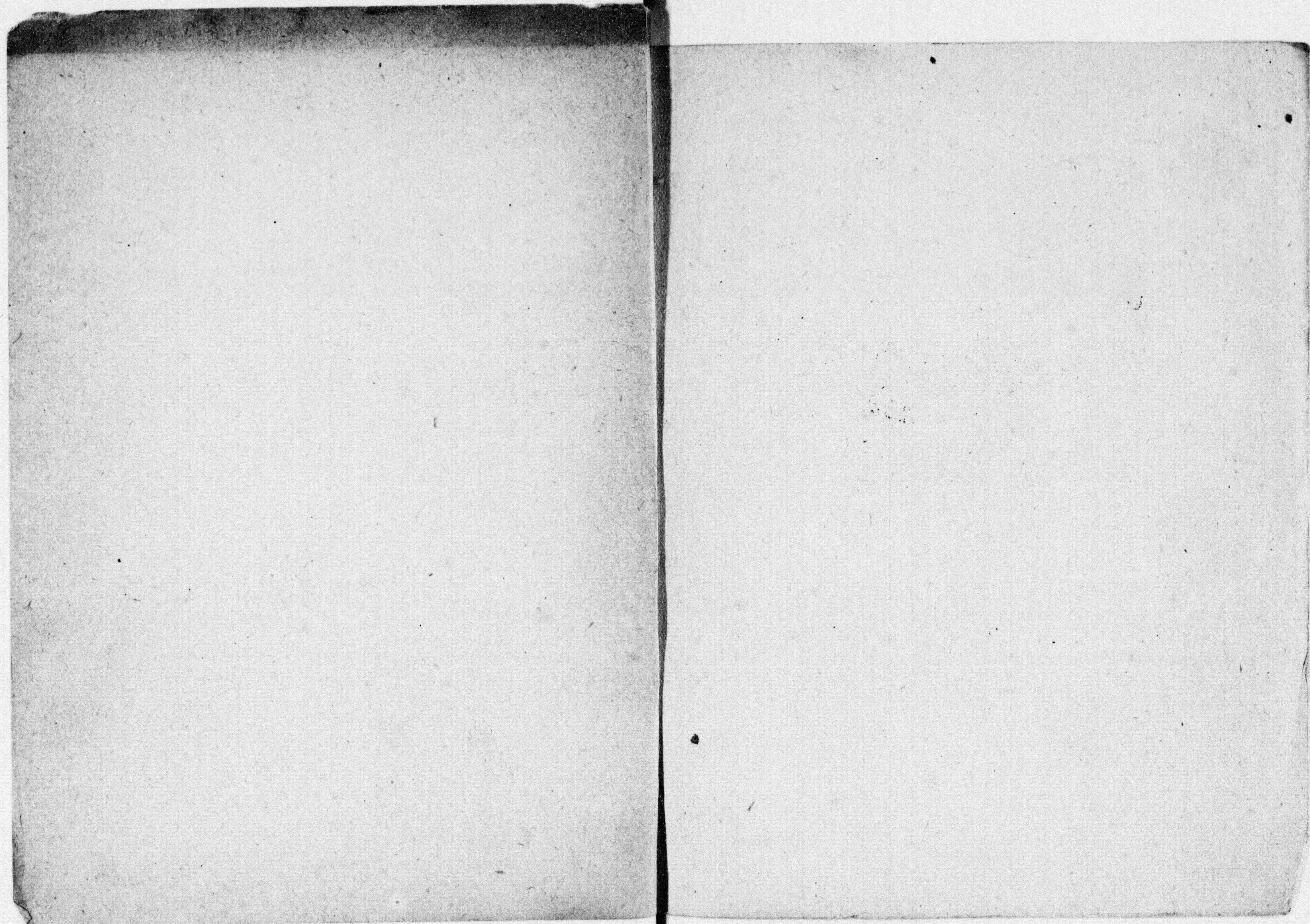


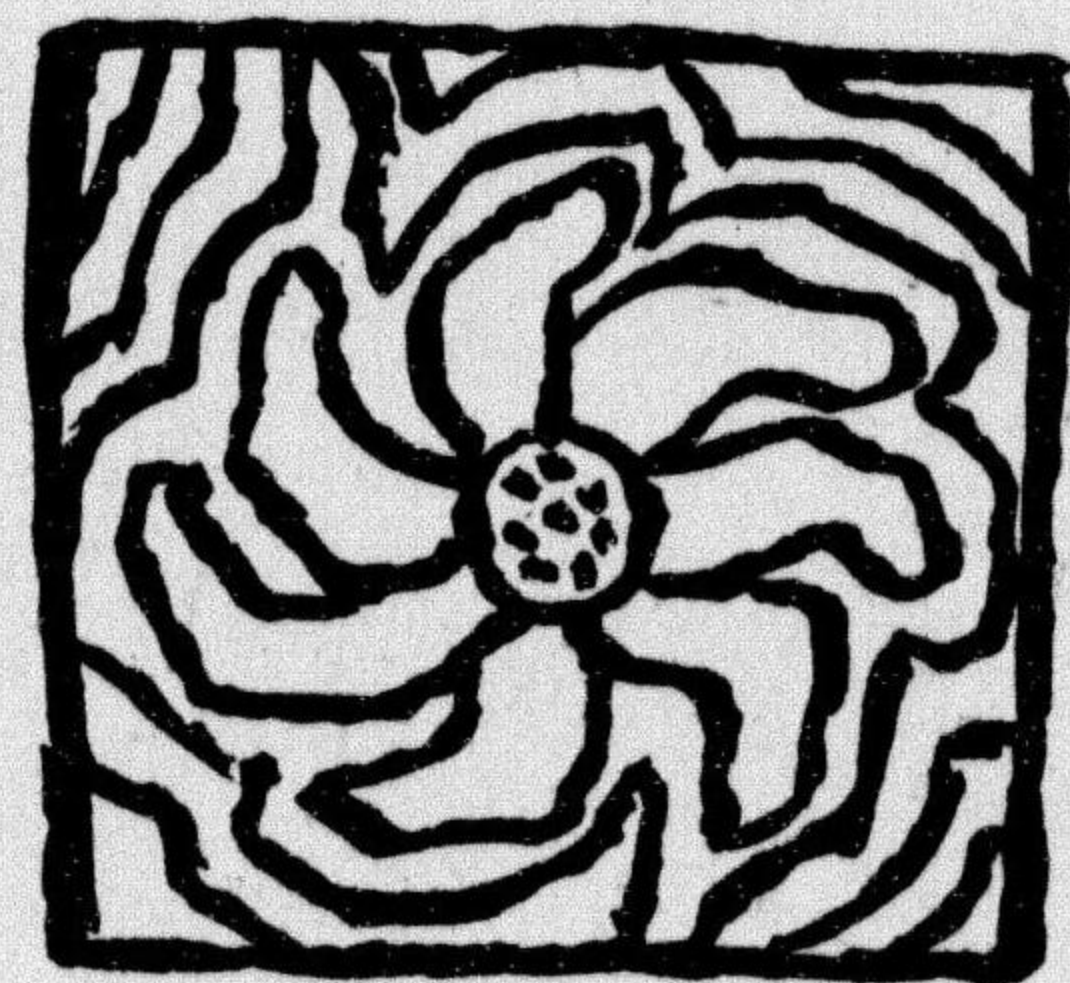
特



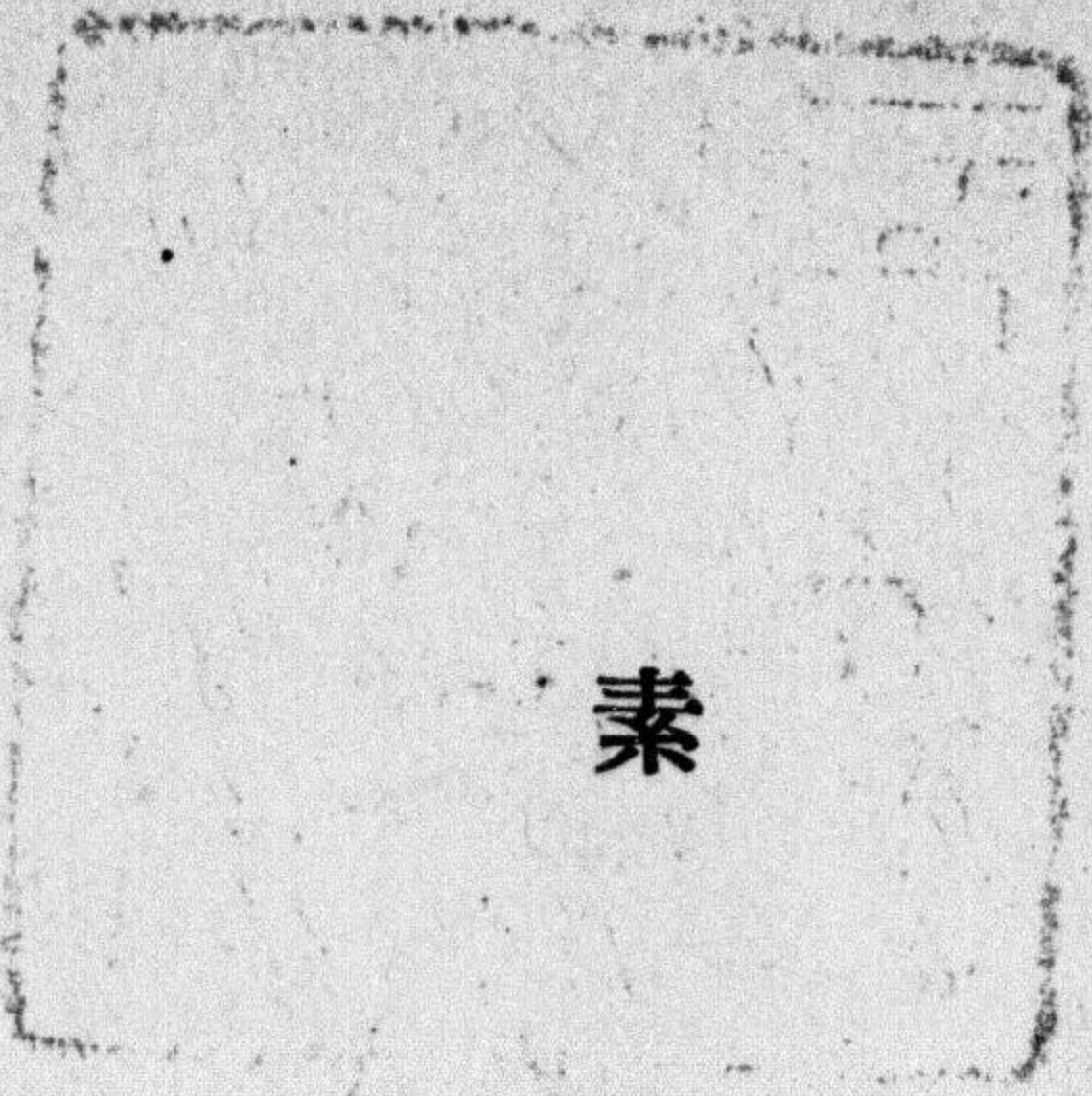
始







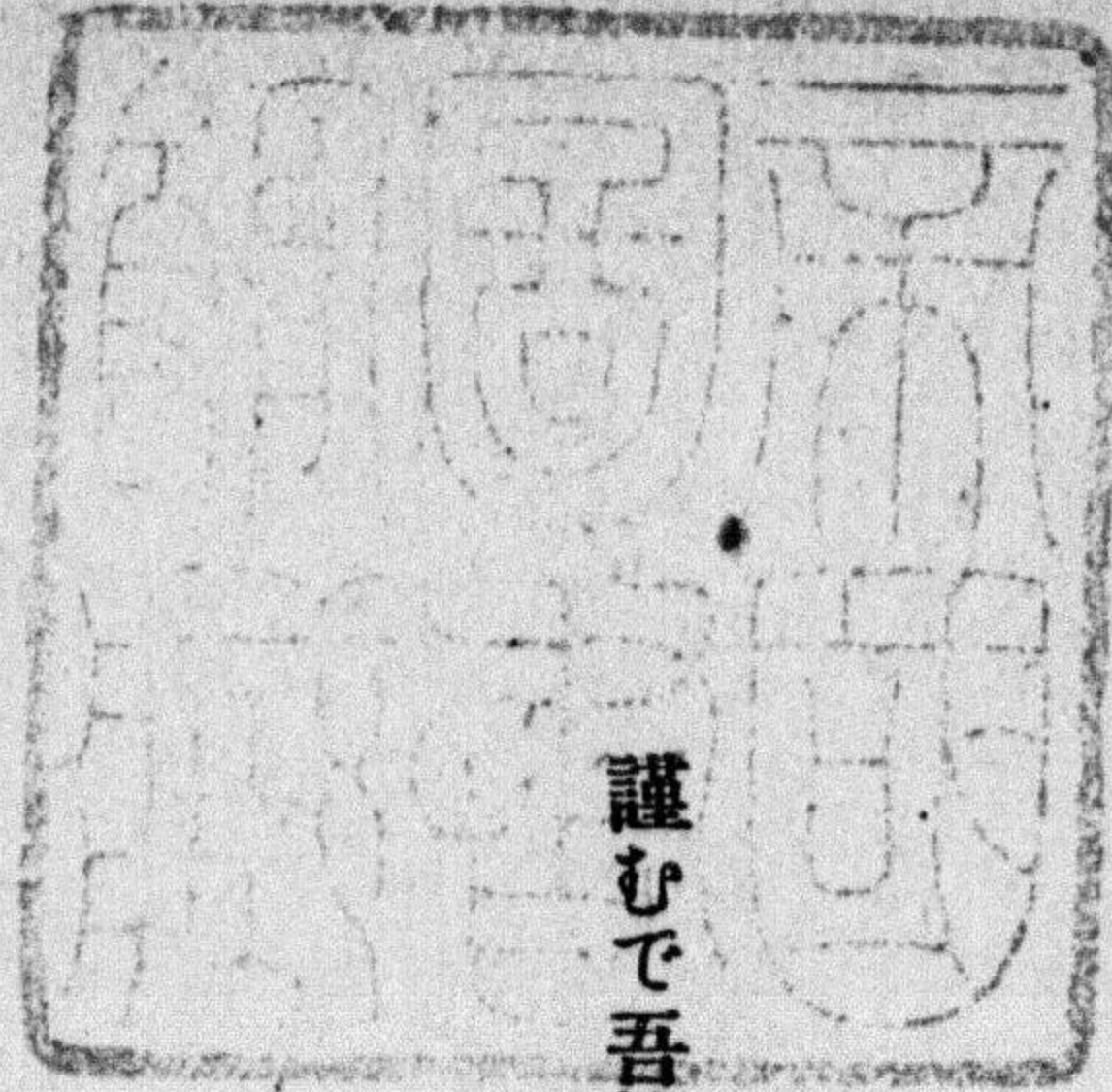
特102
698



素

描

明石國助
鶴巻恒松
竹内勝太郎



謹むで吾等の詩集を、レオナルド・ダ・ヴキンチに捧ぐ

野村信三 寄贈本

大正
8. 6. 9
寄贈

素描目次

明石園助	
我等の泉	1
竹内勝太郎	
輝く朝	9
五位鷲	11
朝林	14
水盤	16
碎くる氷	18
赤き雲	20
川霧	22
雪の展望	24
渚の上	28
曉のあひま	32
月光と露	35
煙	37

水の上の光	41
聲曲	45
爪きり草	49
コスモス	50
雪の幻像	51
村の雪道	55
春日野の暮	58
法隆寺松林	60
法輪寺遠望	62
唐招提寺歸途	66
薬師寺の塔	68
高臺寺遺迹	70
建仁寺夜半	71
松	73
潮	75
燈影	75



居づくまれる女の髪と口唇

|| 鶴巻恒松 ||

驚	...	77
嗟嘆	...	80
黄昏に	...	82
水鏡	...	86
告白	...	88
鶴巻恒松	◆	
風景	...	91
狂人の歌	...	93
ダリア	...	65
憧憬	...	100

表紙	鶴巻恒松
装禎	全
挿繪	全
居づくまれる女の髪と唇	
噴水	
異教徒	◆

我等の泉

明石國助

我等の泉

明 石 國 助

1

ある男は斯ふ曰つた……。

「乃公はジツと雲を眺めて見ても、一日や二日は暮せる男だ」と。天文學者に
でもなれば好いものを、不幸な事には、此男は醫者だ。それで居て、雲のゆた
かな、第一印象的、な繪を描き、憂はし氣な風信草の如き、詩を作る。病
院の冷徹な屍躰室で、メスを閃めかしながら、生に悶えて、南國の熱と、光と、
色とに憧れて居る男だ。此男の眼には、鬱金草を見てさへ、饒舌の、美しい女

の、健康な裸体の誘惑を感じるのだ。

自画像を、何遍も描いて見た。無技巧な筆觸は、奥深い色彩は、乃公達の感情と共鳴して、震えて居る。

「電信柱一本を描いても、立派な藝術だ……」。

吹雪の夜、北陸の寒空を漂泊ふて、瓦斯燈の光と、赤い郵便箱に藝術を感じ、表現を試み、繪は出来たが、風邪を引込むて熱を出した。これが既に、詩だと床の中で喜ぶ男だ。

繪畫は詩である。感激しつつ、自然に向つて刷毛を動かして居ると、だん／＼自然から詩が流れて出て来る。種々な快調が、自然と感情の間を往來する。悦樂が至高潮に達すると、聲を張上げて歌ひたくなる、筋肉の躍動を感じ

て踊りたくなる。此處迄來ると、此男は刷毛を、投げ捨てるのだ。だから繪は未完成なのかも知れぬ。然しそれで好いのだ。其處に此男の藝術境が展開して居るのだ。

繪畫は詩である、詩を感じない繪は藝術ではない。此男の生きる道は只だ一つ、詩と繪畫の泉に、いつ迄も、いつ迄も(死んだ後までも)人魚の如く、浸らして置けば、それで好いのだ。

二

ある男は斯ふ曰つた……。

『自然は乃公達の静物だ、そして乃公達の生命だ』と。ドストイエフスキーも、杜翁も、マールテルランタも、フローベルも、ニジンスキーも、セザンヌも、

ロダンも此男の生命だ。

黙つてたいで、黙つて居て、微笑むのは乃公は好きだ。自然は黙つて居る、そして微笑むて居る。モナ・リザでも、黙つて、スヒンクスの様な、笑の謎を傾けてるではないか。此男も黙つて居て、微笑みながら詩を作つて居る。その詩は、白金の盃に、真紅な酒を盛つた様だ。乃公は其酒を呑むと、不思議に夢を見る、幻を見る。

白樺の森の彼方に、ニムフに取巻かれた、美の神が、此世界に存在せない様を、好い聲で、最高音で、歌を唄つて居る。歌は、イリアッド物語かも知れぬ、乃公には判らない。乃公は歌の方へ行かうとすると、前に小川が私言きつゝ、睡蓮を浮べて、流れて居る、橋がないから、渡渉らうとして、流れを見る

と、金剛石や、真珠が底に輝いて居る、水は雪が解けた計りに、冷たい。流れに浸す可く、乃公の脚は、餘りに汚い。大きな白鳥が泳いで来た、頭を傾げて、背中に乗れと云ふ様だ。乃公は向岸に着いたが、歌の主までには、大分距離がある。一步踏み出すと、眼の前に、美はしい、紅の花が唯だ一つ咲いて居る、乃公は急に夫れが欲しくなつて、手を延ばすと、届かない。木に攀つたが、中々届かない。乃公は歌を忘れて、紅の花が欲しくなつた、そして尙ほ攀ちた。紅の花は、おいでをくししながら、可愛い口唇を動かしながら、乃公が攀れば攀ちる程、上へ上へと、逃げて行くのだ。紅の花の口唇から通ふ、香水の様な好い匂が、乃公の身軀を包むだと思ふと、乃公はもう、動けなくなつた、そして見なくなつた。

美アプロジテの神、あの聲、白鳥、紅くわなるの花、あの可愛い口唇、香水ラ・ローズの様な息！ あ、乃公おれは憶ふ計りて、動けない。乃公はもう狂ひ相になつて來た、狂ふ、狂ふ、くるふ——。

此男の詩は夢を見る、幻を見る、氣が狂ふ、然し乃公おれは幾遍でも繰返して居る。そして何時いつでも、苦き盃なを嘗めて居る。

三

ある男は斯ふ曰つた……。

「乃公達の泉は廣い、然し狭い。全ての道は、羅馬に通じて居る、然し地獄にも通じて居る。乃公おれ達の泉は、今三つの滴りより無い、繪畫と、詩と、自然とだ。賑やかだが、寂しい。華やかだが、孤獨だ。けれど何物にも囚はれない、

獨創的を、世の中に比ぶ可き、何物も無いものを、持つて居る。乃公おれ達の繪畫を見よ、詩を讀めよ、自然を憶へよ。然し、然し……。」と。此泉の男達は、音樂に餓れて居るのだ、乃公おれは思ふ、繪畫は詩だ、詩は音樂だ、此男達の藝術の中には、立派な音樂があるのだ。

繪畫も、詩も、音樂も、要するに自然の表現である、今、此の三人の男達を、詩と繪畫の泉に、いつ迄も、いつ迄も(死んだ後までも)人魚イ・イ・イの如く、浸らして置けば、それで好いのだ。自然に音樂は湧いて來る、それは此男達の生きる、唯一の泉だ。——大正七年十一月——



噴
水

|| 恒
松 ||

水
盤

竹内勝太郎

輝く朝

朝は輝く、凡てのものの上に、
喜び光り、露となり
枝々のさき、青葉のおもて
なめらかにすべりて消ゆ。

そよ風の足裏あたまにたわむ蜘蛛の網、
木の間の空に波打ちて

この日の朝の靈魂かと
笑ふ草花、女王の如き柘榴の花。

咽喉も胸もふくらませたる班鳩の
熱情に口ごもりたるくぐみ聲、
明るし、目覺めよ、双手をあげよ、
喜びの波立つ空に世界は進む、まろび
つつ進む、 驀地に。

五位鷺

空靈に響きて鳴くや

五位鷺、

張り裂けし人の心もかくや

高鳴りて斷るる一絃琴。

その聲森の茂みの木の葉に轟く雷か、

亡き愛人の精靈か、

遠き廣野に響く角笛の如くに

心の羊を集めうなひ兒を集め
母の乳房に呼び返す。

闇の夜の空深く明るき聲は燐ぞ、
一瞬に輝き燃えて

全靈を燃えつくす

人の世の榮光、希望、

涙の露を落すなる生命の滴。

暴風の前の灯とも消ゆるや

五位の聲、

戀か怨か、現身の苦惱もかくや
飛び去りし星の光に反映る唄。

朝 林

木の間洩る喜びの光、
額に露おく草々の
楽しさを吹く微風
目覚めし子供の喜ぶ微笑。

何處にか駒鳥鳴けり
七月の勇ましき唄ひ手の咽喉

晴れ晴れと流るる調
燦めく木の葉と耀よう調

檜の梢に駒鳥鳴けり、
初夏の朝の盡させぬ喜び
枝より枝へ微風の
うつす微笑、こぼるる光の露。

水 盤

夜深く目醒めつつわれひとり聞く、
水盤にしたたり落つる水の音を聞く。

絶え間なく滴り滴る水の交響樂シムホユ

慄へて響くピアノの快速調アレグロ、

立琴ハイフ、笛フルウト、トロンボン……。

さざめく木の葉と暴風あらしの指のオルガンと
重く哀しくすすり泣くヴァオロンの伴奏どもあはせ
流るる水に黒髪とかす緩徐曲アンデシテ。

凡てそは暗き夜の空、うつろなる苑まの奥
庭の小徑の水盤にしたたり落る水の曲
あはれ水の夜曲セレナード……

砕くる氷

雲深き空なれども
月は隅なく照り輝く。
その光は煙りつゝ
平なる地の上に
悲愁の蒼白き蔭を作る。

聽け、幽に遠く、

大いなる河を閉ざせし厚氷、
その氷月光に照らされつ
自ら満ち足りわたりて
聽け、内より砕け落つる響を。

赤き雲

曉に鐘打ちゆらぎたる後暫し
光は白々と東より静にさし來る。
地上のものなべて尙目覺めず
時折に勞働者の車の巷を重く通り過ぐ。

呻めくが如き噪音を高めつゝ
世界は今苦惱と悲痛の生活に進み入らん

とす、

されども幸福なる輩族は
未だ甘き眠りをむさぼるなり。

涙は重たく、悔は苦し、
家々の上に立ちこめし深き霧、
消ゆるに由なし、されど見よ
東の空の最中にただ一つ雲の染まるを。

川霧

眠れる水は静かなり

乳白色の朝霧は

愁ひの如く美しく

流れの胸をとざしたり。

朧に浮ぶ橋梁も

舟のかたちも奥深く、

岸の柳は胸疾めり
しほるゝ如く、泣く如く。

優しき鳥は水に下り、

(失はれたる愛の紀念ぞ)

そが悲哀を呑まんとす。

消へゆく人のしたはしく、

(孤兒ゆゑに涙も落ちにき)

ひまなく川に霧は降る。

雪の展望

—

暫し村々に雪晴れて、
日の光まばゆく落つる
白々と廣野の上。

見晴るかす方は、遠く

仄暗き山脈つらなりて
灰色空の涯に消へつゝ……………

畦、道、農家の點々、
所々に森の黒黝、寺の塔、
燦として白金を燃やす野の面。

鐘の音靜に鳴り響き
また降りいだす粉雪、吹雪
日は朧に霞み、暫し眺望はかはき消さる。

柔らかに降り積りし雪の上に
静かなる曙は下り來たる、
何處ともなく流れ通ふ
空に優しく懐しき精氣あり。

ものゝ音絶へて久しくなり
動かざる樹々の永遠の相すがた
恍として燦として真直に立てり

あゝ氷れる、嚴そかなる拜列。

雲間に日の輝きて
斑まだらなる家と路上と田畑に光を落し、
山の峽はざまの繁みに數鳴く鳥の聲々
今雪晴れの廣野のはてに澄みわたる。

渚の上

長旅の途上にして

われはふと、白波よする

ゆるき渚に憩ひたり

廣々と砂熱き夏の午後。

われ寝そべりて夢うつつ、

沖邊遙かに浮ける雲、青き空、

煙ぶれる海に眺め入る、

その飛び去る如き愉快よろこびよ。

常に常に沖にありて、

近づかざる船の白帆、

ああ、その如き望みもあり、

われはただ磯邊によする波を見る。

ああ、單調なる波の響き！

渚の砂にくづをれ落つる波頭は

瞬時に消えてまた白く、
まぼろしに似て現實なり。

さりながらそれは永遠の

今の刹那に縮め現は^れし姿ならずや、

われもまた長旅の途上にあると云ふも、

愚かなり、ただ泡沫の水面の上に浮びしのみ。

消へゆくものは浪ならず、響ならず、

將やわが現身ならず、一切は

波間に躍る魚の如く水底深く姿をかくす

沖の白帆は永遠の動し難き墓標の如し。

信せよ、凡ての物象は永遠なり、

われかくて眞夏のたゆき磯の上に

ねそべりつつ、時と世界を忘れはて、

悲しき心に打ちよする波の白きを見入りたり。

曉のあひま

夜は静かなり
群青の
絹の帷幕か
淡すれゆく
黎明雲の
晴れやかさ。

小鳥は樹々に
めざめたり
露に輝く
枝と葉に
聲かけ渡す
伴奏。

仕事に急ぐ
工人の
青き沈黙の群と影

地上を歩む

今か朝

赤金光の空に燃ゆ。

月光と露(小曲)

桐の茂みに

月は映ゆ

葉末の露の

数あまた

黄金こがね白銀しろがね鈴を振る。

そも露の音か

しげくと

蟲の聲する草むらに
月の光のひろごりて
黄金白銀鈴を振る。

焰

焰の上に
焰をかさねよ
燃へ盛る火を
尙燃えしめよ。

焔は美し
焔はきよし
燃ゆる焔に
汝が慾情を抛げ入れよ。
夏の入り日は
空に消え
今こそ秋は
傳ふらん。

惱懊^{なやみ}み悲愁^{かなし}み
鬱憂^{ふさ}の

木の葉は冷たき池水に
音なく落ちて沈むべし。

いざ、火をかきたてよ
我等爐邊^{いろはた}に手を取りて
かすかすの思ひ出を
しめやかに物語らん。

火を消すなかれ
更に焰を燃えしめよ
かくて我等の
残りし愛を照らさしめよ。

焰を消すは
罪なり
木片きざれ枯れ葉を抛げ入れよ
かくて我等の短き命いのちに光を添よ。

水の上の光

水の上に
光は落ちて消ゆ
静かに
ふるえつつ。

落葉散り
今ぞ秋なる
水のべの
老ひし柳よ。

柳のかげに
心はなげく
静に
ふるへつつ。

わが愛は消え
時は過ぎたり
すすり泣く
岸邊の水の音。

おお、思ひ出でよと
そこにもなげくか、夜の風
されどまた忘れよと
柳の葉は呷きつ。

思ひ出づとも忘るとも
わが悔恨はいや深し
冷めたき水に額をおき
心破れぬべし。

いと暗き水の上
夜もすがら光りて
小舟の灯は
ふるへつつ消ゆ……

聲
曲

ひとりしあれば
わがたましひ靈魂は
日と夜と
けぢめもわかぬ
空あひにぞ
とけゆくなり。

その空よりは朧なる

遠き記憶の
切れはしを
織るや黄金の我胸に
妙に幽けき黄昏の
微風さよかぜの手の
びあの。

光を揺りて
色あする
空に望みの溺るるは

わが身の夢か
濃紫こむらさき
ものの音響く霧のうち。

それと知らねど
空合ひに
輝く光なほ残る
調べもゆるく
聲かすか
胸痛みゆく

びあの。

爪きり草(小曲)

淡紅色うすべにいろの爪きり草

あはれ愚かおろこの小娘の

露つゆにもめげぬ微笑ほほえみか

秋の悲しさ身に染むる

つめ切草つめきりくさの咲きにけり

うす紅うすべにいろに美しく。



水のほとり

|| 恒 松 ||

コスモス (小曲)

廣野が末に秋風渡たり
漂泊^{さすら}う足も疲れたり
木の葉草の葉さざめけど
わが世のなれのはての身には
はかなしいとわし、白きコスモス。

雪の幻像

われは歩みき、山の邊を、

ひととき晴れし粉雪は

再び霏々とふりしきり

かなたの下の村々は薄き帷幕とばりに隠れたり。

この時われは雪の上に

蒼ざめはてし幻像まぼろしの女性の面を見出しぬ、

われその前にたじろきて
沈黙もだしのままに佇めり、また戦あつけり。

彼女は云ひぬ、『旅人よ、

おん身は知れり、われの誰なるかを、
またよく知れりかの山の下なる村々を、
されどおん身は今この山邊より遙に過ぎ
去らんとす。』

われは佇み頸うなじたれ、言葉もなくて目つぶ
りぬ、彼女は云ひぬ、『旅人よ、

おん身はわれ等が愛の深さを知れり
また悲しみの強さを知れり、わが子よ、
おん身はわれ等に背かんとすや、
流さるゝ罪人の如く人にかくれて、
ひそやかにこの山邊より行かんとする
や。』

われ悲しみ無言に歩み始めたり。
彼女は云ひぬ、『わが愛子あやしこよ。
忘るるなかれ、おん身が故郷を。

われ等は常におん身を愛しおん身を待て
り。』

彼女は歎きて雪の上にくづをれぬ、

『されどわれ等はおん身が忘恩をせめじ。』

雪止みて空晴れぬ、

まばゆき光は村々を輝かし

遠き野末に驛路の馬の鈴の音ひびきぬ、

かくてわれ急ぎ歩みき、山の邊を。

村の雪道

村の雪道日は照り居れど、

降りやみし雪の名残りか

激しき風の吹き荒るる。

路の涯より涯にまで

數條深き車のわだち、

人の足跡、つけにたり。

されど野面は空しく白し、
森の狐の子等は今穴より出でて
木の下に遊び戯むるべし。

大いなる犬も仔犬も共に
雪を跳ね飛ばしつつ走り廻り、
喜びまろげ、はたうめく。

そこにもこゝにも、

空高々と、嬉しげに
子供が誇りの繪紙ゑがしをたて。

仕事を休める百姓は
楽しく煙草くゆらしつつ、
豊饒の豫兆に微笑むなり。

何處にか鳴く鶴ひよの聲
さかしげなる南天の實の
啄つひばまるるも知らず雪に赤し。

春日野の暮れ

森の奥より奥に、樹の枝より枝に、
子供らしき喇叭の音は響けり、
その喇叭は鹿を呼び集め、
樹々のあなただ遙に徧して消ゆ。

日は春^{うす}き、灰色雲に和^{なご}みて暗く、
空にはただ寂しき風の渡るのみ、
この日の悲しみか、生の重みか、
尙黙せる黒き鐘樓は春日興福寺。
樹の根を踏みて集まり來る鹿の群、
牧人は餌を投げ喇叭を高く吹きつつ、
かくて集まりし鹿曳きつれて、暮れの
間を、
彼等の小屋に歸るならん、無言に急ぐ夢
の列。

法隆寺松林

曇り日の黄昏れ近く
降るとしもなきそぼ雨の
晴れゆく空に日の光
薄くさしそう青麥の幾うねり。

梨の花白く咲く木の下に
顔輝やかし兩手のべ
今日の仕事に勞働める小さき百姓

そもまた静かなる眺望のうち。

松林のなか、道は緑の蔭にして
奥深くふかくと微見ほのみゆる法隆寺
樓門、塔の古代いにしへに心牽ひく良き像かたち

安らかに風吹きめぐるその松林
暮れゆく春にせかるれど
われは歩まん、残れる夢を喜びて。

法輪寺遠望

ぬかるみふかき田甫路

杖をとせめぬ、見返へりぬ

春づく日差し茜なり。

遙に見ゆる山の裾

一かたまりの森の上に屋根のみあるは
廢れたる、尙美しき法輪寺。

僧もなきかどわれ問へば
友は答へぬ、今はなしと、
入り日に染まる屋根瓦。

訪れ心切なれど、日は沈みたり
黄昏れの短きあわひ盡きぬらし
いざわが友よ、静にゆかむ田甫路。

唐招提寺歸途

雨降れど静かなり
田畑の間の小砂路
市街は彼方に見ゆれども
心ひかるる寺の屋根。

此の世の苦惱消へ失せぬ、
無言に歩む道すから
山や野や、小川の流れ、丘の森、

凡てのものに眼をとどむ。

雨晴れたれば蝙蝠傘すばめん
田代に盛るげんげの花、
久遠の美なる、寧樂の榮の跡なりや
心ひかるる田舎道。

薬師寺の塔

仰ぎ見る塔の高さよ

されど近づき難からず恐ろしからず、

温容嚴かにして又優しく

そも古代いたしへの高徳の老僧見る如し、

その偉大たほいま。

老いたれど氣力盛なり

古き相すがたのうちに尙大いなる若さあり、

一流の情熱漂ひ流れてそを取り巻く
近づけばただ空し、蟲惑むご深き木の柱。

言葉失ひただ一人砂地の上に佇めば
じじに雨降る曇り空、
雨は降れども音もなし、塔を包みて柔か
く
空と地と、夢うつつなる美よき調しらべ。

高臺寺逍遙

椎の木の間漏る月かげは

眞白にぞ夏草の上にひろがる

ああ、空し、心虚し歩めど佇めど。

この處過去を追はず未來を頼まず

ただ凡て今あるがまま

風そよろ吹き過ぎてたわめる萩の枝の露。

風そよろ吹き來たりて思念そぞろなり

夜は更けゆけど重からず

ただ虚し、鳴きさかる池の蛙等。

建仁寺夜半

夜は深し心重たし

悲愁うわいをのみて歩めど空は闇、

遙かに遠き森のうち

梟鳴けり、道暗し

慈悲か、そもまた哀憐か

折柄中有ゆを打ち揺する建仁寺陀羅尼×の鐘。

(×陀羅尼の鐘は往昔加茂川鐘ヶ淵より出てたり
と傳ふ。)

松

日は遠きにあり、

峽はざまの上に白き雲

少し黄ばみて浮びたる

假睡まどろむ如し、その光。

日は西にあり、

芝草に寝そべりて、夢てなしうつつでなし

空を仰げばはるばると
小鳥の姿消へゆけり。

日は遠きにあり、
軽き風音もなく吹く
松の葉は潮の如く波だちて
さらびやか、はふり落しまた喜びもて身
につくる光の露。

(嵯峨天龍寺にて)

澗

木の枝越しに下遠く
澗める水流見下ろせば
美しや、春うつす碧色なる蟲惑の
白日の幻夢うづを巻く。

われに悲しき記憶あり、
水には沈める木の影ふかし
そは共に流るる生命に美を増すのみ、

水流は曲る、水の渦。

水流は曲り、ひろびろし
うす曇りせる空あひに
何か愁へる渡月橋、
木の枝越しに舟のながるる。

(嵐山に失はれし愛を回想して)

燈 影

水の上にゆらるる灯影、
ゆれども絶えず消えゆかす
まことの生命今ぞ知る。

まことの生命美を燃やす。
靈魂蝕し静かなり
水は揺れどもかかはらず。

淡墨^{うすずみ}かけし色合に(沈黙^{しじま}か夢か)
岸べの柳なかば消ゆ、
ああ、水の上に揺らるる灯影^{ほかげ}。

鷺

いつよりぞそこにありけん、
いづこよりそこに來たりし、
みじろがぬ、水のべの、
小さき白鷺。

歌はねど、汝^{いまし}に聲あり、
打ちもだしたる汝^なが翼、

白銀の夢ともなりて、
賢人の胸に入るべし。

細々と立てる姿よ、
竦めたる首の静けさ、
野にありて苦行つむ、これ、
年老いし修道士。

われは汝を見しより、
孤獨の美しきを知りぬ。

愁ひも歎きもはた惱みもあらで、
水にうつりし影の麗はしさよ。

水の面に波だたず、
いかに汝はやすらかに行ひすまし、
いかに汝は黙想に耽りありけん
水の邊の白鷺。

嗟 嘆

われ水を愛す、黄昏れ暗く、
臃なる霧地上を蔽ふ時、
流れず、動かす、形定かならぬ
ものの影うつす水をわれは愛す。

ああ、凡てのもの夢のごとかれ。
群りてまた消へゆく雲にも似て、

慾情の亂れつきせぬ哀しき子等に、
光なく、形臃なる陰影の世界こそ嬉しけれ。

實に愛する人に取りては忘恩の輩なり、
されども常にわれ過去を忘るゝ暇なし、
思ひ出は影ともなりてわが水面に動かす。

かげ暗き池水に自が姿をうつし見なば、
さなり、過ぎし日のわが憂愁の数々、
ああ、亦新しくわが心の上に紗をかけん。

黄昏に

君よ、輝く名と榮ある富と、また
美しき才能とを望むなかれ。
遙かある街をのぞみつつ、
われは黄昏に山を下りゆく人なり。

日は落ちぬ。群がる雲空を流れ、
風は樹々の梢より梢に適ぎゆく。

その優しき聲に聞き惚れなば、
われまたうつし身の歎びに心失ふべし。

見よ、臙に煙る街はかなたにあり、
光榮ある生と譽ある死と、

現れては消ゆる様々の美しき夢、
また黄金白銀の渦巻く波はかなたにあり。

澄火はゆらめく。しめやかなる夕、
柔かなる夜の帷の底深く、かなた

わが歩む脚の下に、黒すみて、眠れる街を、
われ眺めつつ今更に涙を流しけり。

ああ、わが若き熱情の燃え盛りし昔、
過去と云へど未だ遠からぬその日には、
無益なる願望にわが身を任せ、愚にも
黄金の夢を手にとらんと、底なき悲歎の淵に沈みぬ。

あだなれや、希望も夢も熱情も、はた
君に持たる愛さへも今は過ぎたり。

さればわれ華美の巷を遠ざかりて、
静かある世界のはてに巢をのみぬ。

いざ、下らん、流るる風のもなかを。
凡てのもの静寂と休息に打ちひたる時、
輝くものみな朧なる霧に包まるる時、
黄昏にわれ街に向ひて山を下らん。

水鏡

紺青に晴れ渡りし秋の空高く、
寒き國より來たる渡り鳥の群は
列を亂して飛びゆきつつ、
ふとささやかなの溜水たまりみづに影を映しけり。

山の林にこぼれたる栗の實を拾はむと、
君とわれ野を越へて遠く來たりしが、君は

いつとなく水のほとりに足をどぞめて、
『卿たんよは戀する人にあらじ。』と低く囁きぬ。

美しき君故にわれは悲しかりけり、そは
水にうつりし野鴨の影にも似て、
つかのまに消へゆく美しき夢よ。

二人ならびて眺め入りにし水かがみ、
いざ手を取りて去らんとすれば、
君微笑みぬ、『卿たんよが眼に戀は愚かしく見ゆべし。』と。

告白

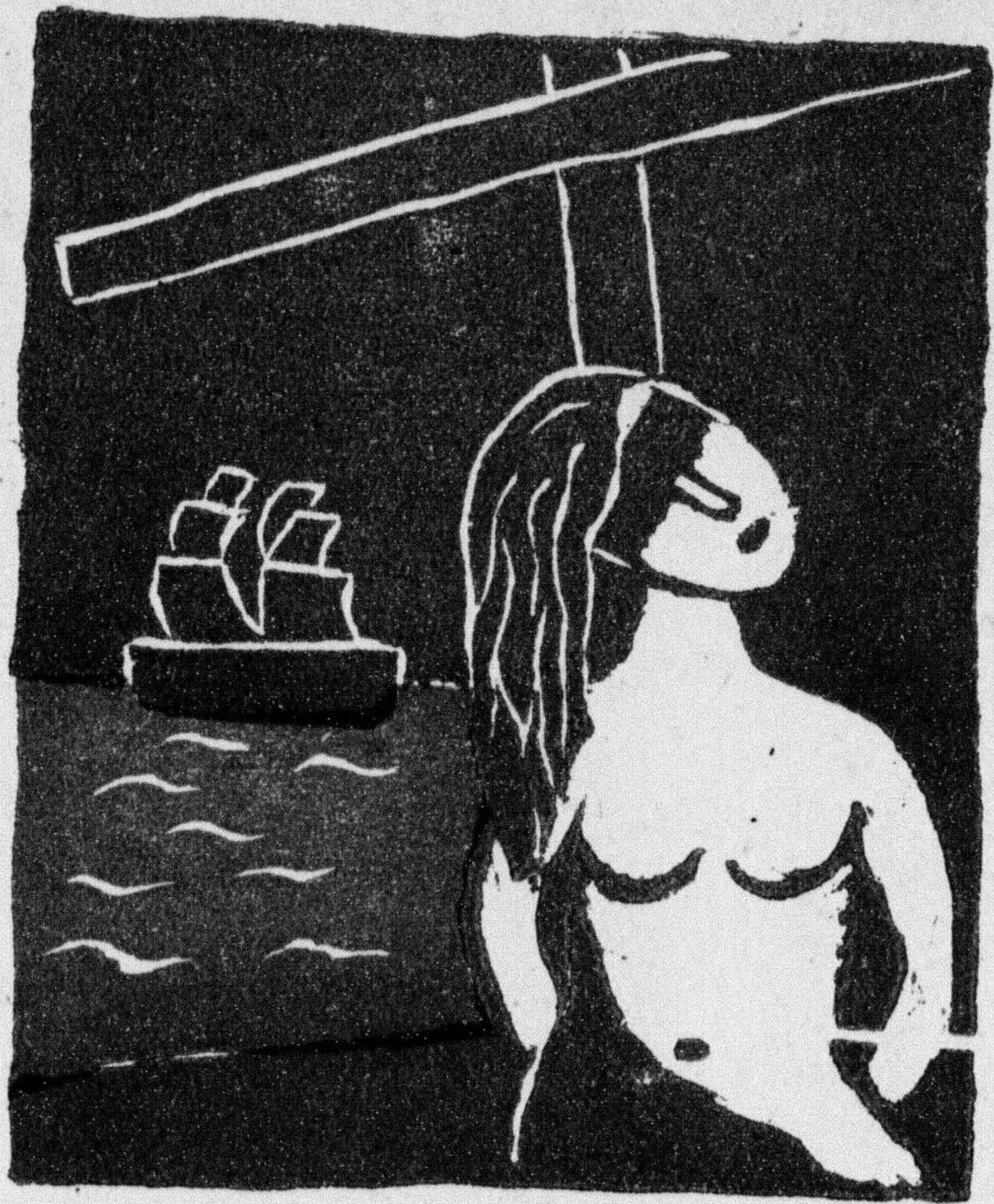
その時われは涼やかなる樹蔭、
黄昏の柔き光のなかに横たわり、
美しき人達と眞夏の夢を楽しみながら、
尙心慰めんともあさざりき。

緑こまやかなる森の茂みに微風渡りて、
丘の園には珍らしき花咲き匂ひ、

黄條美しき胡蜂のうなりは、
おどけたる猿の鳴く聲と混ざり合ひぬ。

門の邊の並木の梢、そは如何に美しかりしぞ、
悲哀知らぬ小鳥等は終日唄ひしものを。
ああ、それ故に尙悲しとてわれは涙し、
それ故に見知らぬ國を慕ひてぞわれは歎けり。

日暮るれば、窓より見おろす橋の上、
朧の靄に包まれて、人の姿車の形の、



異
教
徒

|| 恒
松 ||

影の如く過ぎゆくを、人はおかしと笑ひしが、
われのみひとり憂悶に胸を痛めぬ。

問ふなかれ、今は如何にと。

明けゆく日より夜の落つるまで、

廢寺の如き家の内、唯無益なる追憶と、

限り知られぬ鬱憂に、冷めたき悔恨を残すのみ。

製作の腹案

鶴卷恒松

風景

眞珠色の光に

憂鬱はかゝやく。

空も連山も野もかゝやく。

電信柱の小さい文明の建設した

喜悅と悲哀とが

鋭い單調の雪の風景の前に

深い孤獨をうたふ。

連山の上の淡紅色の雪の光は

深山に沈黙しつゝ、死にゆく人達の
冷たい運命の光か。

町に米と薪と炭とを運び、
塩鮭と鯖と下駄と

赤い簪を求めかへる人達、

雪の街道に

首垂れた黒い沈黙の行列が続く頃には

連山も野も夕暗中にとけてゆく――

電信柱もとけてゆく――

蒼ざめて無情の中にとけてゆく。

狂人の歌

裸體の女は乳房下を貫かれて倒れてゐる。

髪をみだし、眼をつりあげ、

齒を食ひしめたる凄惨の面

苦惱の面、

斷末魔の瘴氣は襲つてくる。

暗に浮く眞白なる胸は

ほのかに波うちて

そが上に滴る紅の血潮。

後、暗の中には

焰は赤くはた黄に燃えあがりて
この世の人とも見分けのつかぬ
異様の人々は踊り狂つてゐる。

乱雑な楽器に合せて歌ふ彼等の歌

——泣くやうな、笑ふやうな、呻くやうな彼等の歌
そは涙の滲むやうな歌

物凄いやうな歌——狂人の歌。

ダ
リ
ア

枕下に置いて寝たダリアの娘たち、
ほんとにお前たちはお喋りだ。

「え、妾たちはお喋りよ、

でもねえ、あなたおききなさい——

大理石の廻廊に金色の熾が燃え、
苑一面にアチモ子の咲く宮殿に
それは美しいお姫さまが、

そのお姫さまが戀なすつて——
物語はそこから始まつてゆきますの」
もういゝから黙つて寝がしておくれ、
明日は朝早くから
いやな仕事にゆくんだから。

「え、妾たちはお喋りよ、
でもねる、おききなさいつてば——
首にまきつくお姫さまの
右手には金の酒に黒の酒

紅あかの酒に緑の酒……」
もう後生だから黙つておくれ、
明日は朝早くから
いやな仕事にゆくんだから。
今日も私の仕事場へ
ひとりの女がやつて来て
「私の可愛い子が死にました、
なにしにあの子は生れて来たんでせう」と。
いやな話はおよしなさい、

あなたはあのサン、アソナの
美の惑の貌かほを憶えていらつして。
お姫さまの波うつ髪が
顔の上にもだれかゝり、
熔けいる瞳と吸ひつくやうな唇と、
その唇が觸れた時……」
あゝもう後生だから、拜むから
どうか黙つて寝かしておくれ、
明日は朝早くから
いやな仕事にゆくんだから。

「え、妾たちはお喋りよ」
枕下に置いて寝たダリアの娘たち、
あゝほんとにお前たちはお喋りだ。

憧憬

灰色なせる雲まに

光は惱みぬ。

限りなき燕の群は

とび交ひ、もつれ合ひ、

見渡す空に練糸ねいの

織る如く、驚く如く、……

精神病院の庭に

アカシヤの木は憂え、

岸の柳はうなだれ

わが風景は歎きぬ。

恐怖おそれやひそむ、――

さあれ(時のゆくひまに)見よ、聴けよ、觸れよ――

秋はゆく、

冬の奏しらべをもたらし

風は吹く、

かよわきものの別れの時。

ひととせ育みし雛はたちぬ。

われの愛でにし果實は落ち、

花は凋み、

慈愛の時はゆかんとす、

かよわきものの別れの時。

(さらば行け、燕等よ！)

われは歎く——

別れの曲、別れの舞

われにしみれば憧憬の歌

かよわきわれの心には

逃れゆくべきすべもなし、

永に果實のみる國、悲しき國、

南の國——われは知らず、われは憧る。

あつき慈愛を胸に罩め、

やさしき希望を胸に抱く、

彼等の死をばわれは問はず、

われは歎く——

逃れゆくべきすべもなし、

永に熱と光と色のあせぬ國、
南の濱邊——われは憧る。

(小さきものよ、心せよ！海は荒る、風は怒る)

われは悲しむ

わが世の苦惱の日を。

南の空は

わがために搖籃を編み、

南の土は

わがために墓標を築かんものを。

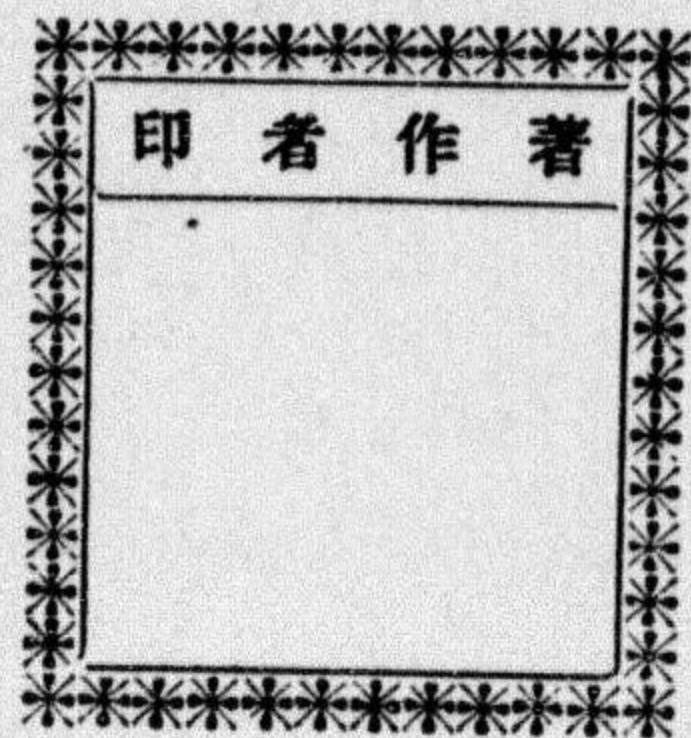
あかあかと夕陽の海に落つる頃

髪長き赤銅色の乙女等の歌の聲

われを誘ひ、あゝわれは憧る。

(さらば行け、燕等よ！かよわき胸毛の一片も狂すなく)

大正八年四月卅日印刷
大正八年五月一日發行



發行者

京都市上京區黑門通中立賣上ル
野村信三
電話四一〇七番

印刷者

京都市上京區河原町通三條上ル
藤井敏治
電話五九六九番

印刷所

京都市上京區河原町通三條上ル
鮮明社
電話五九六九番

非賣品

279
900

終

